詩編３２編：罪の赦し（霊的格闘を経ての）と感謝・喜び（2020 年 5 月 29 日用　TM）

　表題は「マスキール」たぶん、「瞑想」「黙想」という謂。詩編 32 編は、6 編、38 編、51 編と並んで懺悔の詩編であり、アウグスティヌスが愛唱し、ルターがパウロ的だと言った詩で、古代教会の「七つの悔い改めの詩」の一つです。「罪」という用語はいわゆる教会用語で漠然と使われていますが、詩編 32 編を味わい、「いかに幸いなことでしょう/背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。」「わたしは罪をあなたに示し、咎を隠しませんでした。…（5 節）を黙想しましょう。

・罪について　聖書は罪そのものについては語らず、赦された罪、神の赦しに覆われた罪について語っています。創世記 3:21 は神の勧告に耳を傾けなかったアダムとイブ(通常「堕罪」と言いますが「罪」いう表現は創世記該当箇所には不在です)に主なる神は「皮の衣を作って着せられた」とあり、これが、バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからである」（ガラテヤ 3:27）という信仰に受け継がれ、I ペテロ 4:8 は「愛は多くの罪を覆う」と語ります。パウロはローマ 4:7 でこの詩編を引用し、「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。主から罪があると見なされない人は、幸いである」と言っています。「背き」（peša’ 規範、法を逸脱すること、意志によってなされた悪しき行為）が赦され（nəśui　nāśā 持ち去られ、引き上げられる）、「罪」（hătā’āh ミスすること、失敗すること）を覆っていただいた者は（kəsui kāsā 覆う、隠す）幸いです。罪とは「背き」はある規則を故意に犯すこと、故意ではなく、失敗することが「罪」と言われています。2 節の「咎」（ʿawon）は英語では有罪 guilt です。神は判事のようにこれを「数える」（yahšōb 考える、勘定する）ことはありません。「欺き」（rəmîyāh）はまさに騙して人を陥れること。そして、人はなんと自分自身を欺きさえするのです。しかし、罪とは基本的に神との関係の破綻であり、慈愛の主なる神に信頼しないことが「罪」なのです。
・罪を告白すること　詩人は自分の不正を認め、それを負うのに良心（社会的共通知における自己関係）の呵責で疲れ果て、その煩悶は、骨まで至り、夏の干ばつのように魂を枯渇させたと言います。「主の御手が重い」！そして、その不正、誤りを秘匿せず（lō-kissîtî）、不正を主なる神の前に示し（’ōwdî’ăkā）、つまり知ってもらい（認知してもらい）、告白するのです（’ōwdeh）。「黙しつづけた」と「わたしは言いました」が見事な対比を描いています。悔い改め（回心）とは全人的に方向転換をして神の恵みに向かって歩みはじまること、さらに懺悔とは、実際に人の前で罪を具体的に告白し、聴いてもらうこと、そして、赦しの宣言を聞くことです。自分の罪を隠さず、告白したら、主なる神はそれを「隠して」くださったというのです。「自分の罪（複数）を公に言い表すなら、神は真実（信実　pistos で正しい(dikaios 義）方ですから、罪（複数）を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。」（I ヨハネ 1:9）「あなた」＝「主なる神」を「見いだしうる間に」（発見したとき）罪責を告白し、祈ることができます。「神に克服されることによって、人は自分自身を克服する。」
・大水の氾濫と救いの喜びの経験　罪を隠しておくことは、「大水が溢れ出るような」甚大な結果をもたらします。しかし、主なる神は、信仰者の「隠れが」、「苦難から守ってくださる方。救いの喜びをもって（rānnê pallêt 救いの歌で/わたしを囲んでくださる方（təsōwbbênî 10 節の「囲まれる」も参照）。神への喜びが防御として彼を囲み、護ると言うのです。
・8-9 節は誰が誰に対して語っているか不鮮明です。いずれにせよ、「喜べ」が基調音です。「主に信頼する者は慈しみ（hesed 恵み）に囲まれる」。神に従う人よ、主によって喜び躍れ（śimhū Yahweh wəgîlū Be glad in Yahweh and rejoice!）主を楽しみ、喜べ。神への歓喜に生きよ！